

佐藤一斎著、川上正光全訳注「言志四録(一)―全四巻―」講談社学術文庫、講談社 1978 年 8 月 10 日刊を読む

無用の用

1. 〔訳文〕

- (1) 世の中の物事は、自然のなりゆきでそうならざるを得ないものがある(皆、存在理由はあるのだ)。
- (2) とかくすると、学問があると称する人は、あるいは人の行なう事を排斥し、無用物視する。
- (3) そしてことに、「天下には無用の物もなければ、無用の事もない」ことを知らない。
- (4) 学人が排斥して、無用物視するものが、大いに役に立つことがある。
- (5) もし、人間の衣食住に何ら役に立たないものは皆無用であると考えれば、天の神は、なぜ無用の物を数多く作ったのだろう。
- (6) 用材にならない草木、食用にならない鳥獣や虫魚などがある。
- (7) 天が果して、如何なる用途を目してこれらのものを生ぜしめたのか、人間の考えが及ばない。
- (8) 易経に「あごのひげをのばして儀容を飾る」とある。
- (9) 其の鬚も何の役に立つものであろうか。
- (10) 我々はそう簡単に物を考えてはいけない。自然のなりゆきというものがあるのだ。

2. 〔訳文〕

- (1) 前条の理屈を人間の事に当てはめてみよう。
- (2) 一年中の仕事はさまざまであるが、これを算えてみれば十の中の七は無用である。
- (3) ただ人は平和な時代にあって、心を寄せるところがないと、「大学」にいう「小人は閑居して不善をなす」ことも少くない。
- (4) 今の世は、貴いも賤しいも、男も女も、無用の用が多くて、それに引きまわされて忙しく働いているから、悪い事をしようという気持ちの起こることが少ないのであろう。
- (5) これも無用の用ということであろう。
- (6) 思うに、太平無事な世の中では、こうならざるを得ないのも、また、自然のなりゆきである。

P128 ~ 131

<コメント>

「無用の用」とは何かがとてもわかりやすく述べられているのが、佐藤一斎著「言志四録」全四巻の第一巻「言志録」である。役に立たないと思われているものが、実際は大きな役割を果たしていることを「無用の用」という。役に立たないように見えるものでも、かえって役に立つこともある。この世に無用なものなど存在しないという教えが「無用の用」だ。素晴らしい考えだと思う。

— 2016年8月11日(木) 林 明夫記 —